

# 本学における小児看護学実習の展開

## — 病棟実習について —

宮下 弘子・宮原 春美・前田 規子

**要 旨** 医学部保健学科での小児看護学実習を検討するにあたって、長崎大学医療技術短期大学部において平成10年度から12年度までの3年間に小児看護学実習を行った学生の実習資料を検討対象として、短大での病棟実習について概要をまとめた。受け持ち事例は性別、発達段階別では比較的均等に選択されていた。学生の自己評価ではどの項目においても教官・指導者の評価よりも低くなっていた。

長崎大学医学部保健学科紀要 15(2): 55-56, 2002

**Key Words** : 小児看護学実習, 実習評価

### I. はじめに

本学医療短大における小児看護学実習は3単位(135時間)である。小児看護学実習全体の目的は、「さまざまな発達段階、健康レベルにある小児とその家族に対して適切な看護のできる能力を養う」こととし、病棟実習においては、1. 受け持ち患児を通して、健康障害が小児およびその家族に及ぼす影響を知る、2. 受け持ち患児に対して日常生活面、治療過程における適切な看護援助ができる、という目標を設定している。病棟実習は大学附属病院小児病棟で5日間の設定である。原則として5日間通してひとりの小児を受け持ち、一通りの看護過程の展開を経験できるようにしている。しかしながら5日間ですべてを行うのはとうてい困難であるので、さまざまな検討を重ねながら実習を展開してきた。今後保健学科での小児看護学実習を検討するにあたって、短大での病棟実習を総括する目的で過去3年分の病棟実習について概要をまとめたので報告する。

### II. 研究方法

#### 1. 対 象

長崎大学医療技術短期大学部において平成10年度から12年度までの3年間に小児看護学実習を行った学生の実習資料を検討対象とした。

#### 2. 方 法

受け持ち事例の内訳、学生の自己評価、指導者・教官評価、学生の感想をもとに集計・分析した。

### III. 結果および考察

#### 1. 受け持ち事例の内訳

各年度における受け持ち事例の内訳を表1～表3に示す。受け持ち事例の男女比は、各年度ともほぼ均等になっていた。発達段階別の分布では平成10年度、11年度が乳

表1. 受け持ち事例の内訳1 性別

	平成10年度	平成11年度	平成12年度
男児	48	43	49
女児	34	32	32

表2. 受け持ち事例の内訳2 発達段階別

	平成10年度	平成11年度	平成12年度
乳児(1歳未満)	4	2	17
年少幼児(~4歳未満)	16	16	19
年長幼児(~就学前)	8	8	13
学童(低学年)	26	12	2
学童(中学年)	10	13	12
学童(高学年)	8	17	8
中学生以上	10	7	10
計	82	75	81

児や年長幼児など年齢層の低い小児の事例が少なかったり等、年度によって多少のばらつきはみられている。しかし実習グループごとの事例の年齢分布は極力偏らないよう、臨床側の配慮がみられていた。

受け持ち事例を主要看護テーマ別にみると、各年度とも最も多かったのは化学療法および放射線療法にともなう看護であり、これは大学附属病院の特殊性のあらわれと思われる。急性期の事例は、川崎病、ネフローゼ症候群、特発性血小板減少性紫斑病、気管支喘息などである。退院に向けてのセルフケアはI型糖尿病とネフローゼ症

表3. 受け持ち事例の内訳3 主要看護テーマ別

	平成10年度	平成11年度	平成12年度
化学療法および放射線療法にともなう看護	28	29	17
検査にともなう看護 (心臓カテーテル、腎生検など)	10	10	6
急性期の治療に対する看護	14	3	14
症状コントロール中の看護	16	23	23
回復期の経過観察	7	2	13
退院に向けてのセルフケア	7	6	5
その他		2	3
計	82	75	81

候群が主なものである。また最近の傾向として、看護のテキストレベルでは載っていないような疾患の小児の事例も増えてきている。小児病棟においても入院期間の短縮化や、長期入院の場合でも治療の合間にはできるだけ自宅で過ごす傾向がみられるようになってきた。また本学の実習と同時期に他学の学生実習が重なることもあり、それらがあいまって受け持ち事例の選択、依頼のために毎回指導者が頭を悩ませる状況になっている。このような状況は今後も続いていくことが予想されるため、何らかの対処が必要になる。

## 2. 学生の自己評価および指導者・教官評価

病棟実習に対する学生の自己評価および指導者・教官評価を年度ごとに平均値で表したものが表4である。学生、指導者、教官が共通に評価する項目のみを示した。

表4. 実習評価（各項目とも10点に換算）

		学生（自己評価）	指導者	教官
患児理解	平成10年度	6.73	7.93	8.13
	平成11年度	7.48	7.53	7.35
	平成12年度	7.43	7.90	7.52
看護計画	平成10年度	6.01	7.77	8.11
	平成11年度	6.35	6.96	7.47
	平成12年度	6.20	7.52	7.51
看護行動	平成10年度	6.23	7.75	8.01
	平成11年度	6.85	7.48	7.41
	平成12年度	6.74	7.74	7.65
評価	平成10年度	5.85	7.65	7.97
	平成11年度	6.39	7.17	7.33
	平成12年度	6.26	7.63	7.61
カンファレンス	平成10年度	6.70	7.26	7.32
	平成11年度	6.40	6.74	6.92
	平成12年度	6.38	7.80	7.88
計	平成10年度	31.52	38.36	39.54
	平成11年度	33.47	35.88	36.48
	平成12年度	33.01	38.59	38.17

ただし現時点では学生の自己評価は参考資料であり、実習の評点には反映させていない。

学生が自分を厳しく評価しているのか、実習での達成感が十分に得られていないのか、いずれにしてもどの項目においても学生の自己評価が最も低くなっている。佐藤らの調査<sup>1)</sup>では、4年制大学における小児看護学の実習で病棟実習の日数は平均9.1日であったと報告している。本学の病棟実習はその約半分強の日数である。それからくる過密さが、学生の自己評価の低さにつながっているのかもしれない。何らかの対策を考える必要があると思われる。

## 3. 実習の感想

実習の自己評価票の下部に自由記載で実習の感想を書く欄をもうけている。そこに記載された内容を「実習で得られた学び」と「実習で感じた困難さ」の視点から意味分類をした。学びのカテゴリーでは、「小児にとっての家族（母親）の存在の大きさ」、「小児、家族（母親）双方への看護の重要性」、「発達段階に応じた援助の必要性」をあげたものが多かった。また困難さのカテゴリーでは、「短期間での看護過程の展開」、「小児へのわかりやすい説明」、「小児および家族とのコミュニケーション」などがあげられていた。中村<sup>2)</sup>は、小児看護学実習の課題の一つとして患児とのコミュニケーションをあげている。そのなかで、「患児と学生のコミュニケーションがとれるようになるまで、指導者は学生が患児と関わるような方法を提示したり、励ましたりすることが必要である」と述べている。また家族とのかかわりにおいても、「家族に看護援助をしようというより、まず家族の思いを知るといった視点に立てるような助言が必要になる」と述べている。指導者、教官がこのようなかかわりができるためには、学生の実習場面にある程度時間的余裕をもってかかわることができる体制も必要と思われる。

## おわりに

短大での病棟実習を総括する目的で過去3年分の病棟実習についてまとめた概要を報告した。さらに詳細について分析・考察を加え、4年制大学での実習のあり方について検討を深めていきたい。

## 文 献

- 1：佐藤奈々子，飯村直子，山村美枝，長内佐斗子，松尾ひとみ，筒井真優美，中野綾美，込山洋美：看護系大学における小児看護学の実習の実態と今後の展望。Quality Nursing, 4: 685-690, 1998.
- 2：中村伸枝：看護学実習の課題解決と発展の試み。Quality Nursing, 7: 239-242, 2001.